



田中美也子先生をお送りする

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比良, 輝夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10663

田中 美也子先生をお送りする

比 良 輝 夫

田中美也子先生は、平成十九年三月三十一日をもって、北海道教育大学釧路校を定年で退職される。

先生は、昭和四十年三月にお茶の水女子大学文教育学部国語国文学科を卒業され、同年四月からお茶の水女子大学文教育学部に助手として勤められ、昭和四十二年四月から私立調布高等学校教諭として赴任された。昭和五十年四月からは、母校お茶の水女子大学文教育学部附属中学校教諭として勤務された。その後、平成九年四月から、北海道教育大学教育学部釧路校教授として赴任され、十年間在職されて、研究・教育及び校務に励まれた。

その間、釧路校のカリキュラム委員会・教育実習委員会・国際交流委員会等の委員を歴任され、大学の運営に携わられた。国際交流委員会の委員長として活躍を始めかけた頃、健康を害された。先生の生まれ故郷であり、教育実践の基盤を固められた土地である東京とはあまりにも異なる気候・風土が、先生のお仕事の進展を妨げようとしたものと思われる。御回復された後もまた幾度かの体調の崩れを乗り越えながら、研究の持続と

学生・院生への指導を続けられた。その強靱な精神力と教育・研究への熱意には、敬服の念を抱かざるを得ない。周囲の同僚達からも、讃嘆の声を聞くこと屢々であった。

先生の専門の研究分野は国語科教育である。お若い頃から、全国大学国語教育学会・日本国語教育学会・国語教育実践理論の会（現国語教育実践理論研究会）・学習院言語技術の会等の会員として活躍された。平成十年には、日本国語教育学会北海道地区理事となられ、この三月迄その重積を果たされている。

言語技術教育としての国語科教育を重視する立場からは、ディベートを中心とした著書・論考にそのお仕事を結実された。また、早い時期から学校図書館の有り方に提言されたり、読書指導の重要性を指摘されていた。文学的文章の指導についても、早くから「学習者の実態」を踏まえた指導法の重視を提唱され、説明的文章の読みについても、生徒の主體的な読みを重視し、レポート学習へと誘う過程を追求されていた。その他、生徒の作文能力の発達に関する研究論考も幾つも発表されている。このように概観してみると、先生の御研究は、国語科教育の分野

の殆ど全てに渡ってなされていると言っても過言ではないと思われる。

先生の御研究は、長い実践経験を基にして、理論と実践の融合という課題を追求されてきたものであるが、近年は明治以降の国語科教育史の再検討にも視野を広められつつあったようである。

最近の先生の研究の幾つかを紹介すると「集団的リフレクションによる授業の試み」について、『語学文学』第三十九号に発表されてから、『北海道教育大学教育実践センター紀要』第二号・第三号・第四号・第七号と、「集団的リフレクション」に関する論考を矢継早に発表されている。また、先生の目配りは、「分析批評」の読み・「読者論的」読み等の分野にも及び、こうしてその軌跡を追ってくると、先生の御研究は広範囲に渡っているばかりでなく、常に国語科教育研究の流れの中で、まさに時代の最先端を切っていたと言え、その先駆的眼力にもまた驚嘆せざるを得ない。

また、先生は、その実践経験と中学校教科書執筆者としての経験から、早くから魯人の『故郷』について論考を発表され、その延長線上の成果として、『月刊国語教育研究』第三四〇号に、「竹内『故郷』が形成した閩土観『私は口がきけなかった』か『私も（也）口がきけなかった』か」という論考を発表され、独自の教材解釈の道も切り開かれた。

これらの多岐に渡る御業績を近く集大成される、と伺って

るが、その公刊の持たれる次第である。

ところで、先生は、大学での教育・研究活動の他に、釧路に赴任されて以来、釧路周辺の国語教師の実践力のレベルアップの為に、公開授業・講演会・研究会での助言等にも精力的に活躍された。時には札幌や道北・遠くは青森まで出向かれ、道東や北海道の国語教育界に大きな足跡を刻まれた。とりわけ、釧路や道東の若手・中堅の女性教師達には、大きな影響を残された。

このように見てくると、十年間という短かい釧路での御活動ではあったものの、先生が様々なるお仕事を果たされていたことに改めて敬意を表したい。浅学非才の私どもには、とても先生のような多岐に及ぶ最先端の研究も教育もまねることすらできはしないが、文字通り余人の追隨を許さぬ高邁な先生のお姿を時に思い浮べて、自らの遅々たる歩みを続けるしかないと思うばかりである。また、至らぬ私どもに、国語教育はいかにあるべきか、身をもって範を示して下さったことにも改めて深く感謝申し上げる次第である。

先生は、御退職後は東京に戻られ、今後は日本語教師として再出発される御予定と仄聞している。くれぐれも御健康には留意されて、また華々しい成果を上げられることを祈念するものである。